



現代日本語における一人称複数代名詞の選択と書き手スタンスの表出 : 日本語教育の視点から

肖, 錦蓮

(Citation)

統計数理研究所共同研究レポート, 435

(Issue Date)

2020-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009075>



現代日本語における一人称複数代名詞の選択と書き手スタンスの表出

—日本語教育の視点から—

肖 錦蓮(神戸大学 大学院生)

syokinren@yahoo.co.jp

Choice of a first-person plural pronoun and stance expression

— From an educational perspective —

XIAO Jinlian (Kobe University, Graduate Student)

概要

本研究では、コーパスデータを利用し、一人称複数代名詞の表現形の幅や代表形、またそれらのスタンス機能について調査を行った。その結果、(1) 語・異形・文字種を考慮した場合、一人称複数代名詞は最大に 60 種を超えるバリエーションが存在すること、(2)「私」、「我」、「たち」を含む表現形はフォーマル度が高いこと、(3) 文字種や前部要素によって、相手包含度が変化すること、(4) 主要な一人称複数代名詞の共起語はフォーマル度と情報の公的性の 2 つの点で区分されること、などが示された。

キーワード

一人称複数代名詞, フォーマル度, 相手包含度, 使用場面

1. はじめに

スムーズなコミュニケーションを行うためには、適切な内容を伝えるだけでなく、適切な方法でそれを伝えることも重要となる。実際、伝達する事実は同じであっても、異なる語彙や文法形式を選択することによって、書き手や話し手は当該の事実について、個人の気持ち、態度、価値判断、評価を間接的に表出することができる。このとき、書き手や話し手個人の気持ち、態度、価値判断、評価を「スタンス」と呼び、スタンスを表出するための様々な語彙や文法形式を「スタンスマーカ」と総称する(Biber, Johansson, Leech, & Finegan, 1999)。

スタンスマーカには多様なものが存在する。Hyland (2005) によれば、ヘッジ(hedges)、増幅詞(boosters)、態度マーカ(attitude markers)、一人称代名詞(self-mentions)の 4 種類が紹介されている。これらは日本語においても同様に重要なものであるが、世界の日本語学習者の大部分を占める中国人日本語学習者の観点から考えると、最も基本的なスタンスマーカは一人称代名詞であると考えられる。中国語においては、日常的に使われる一人称代名詞は単数の「我」と複数の「我们」の 2 種類しかない。一方、日本語では、語・異形・文字種の 3 つのレベルで、様々なバリエーションが存在する。例えば、「私」を使うか、「僕」を使うかによって、また、「私たち」を使うか「私ら」を使うかによって、それぞれ異なるニュアンスが生じている可能性が高い。また、同じ語に

についても、様々な異形が存在する。例えば、「わたし」と「あたし」は語としては同じものであるが、伝わるニュアンスは異なっているだろう。さらに、書き言葉についていえば、文字種のバリエーションも考慮すべきである。「ぼく」、「ボク」や「僕」、あるいは「私達」、「私たち」や「わたしたち」といった文字種を異にする語によって、伝わるニュアンスやイメージには違いがあると思われる。

日本語学習者の視点から見た場合、重要になるのは、(1) 日本語にはこれらの表現バリエーションがどの程度存在するのか、(2) そのうち、典型的なものは何であるのか、(3) 異なる表現形を選ぶことで、どのように異なったスタンスが表出されるのかという 3 つの点である。これらの情報を得る上で、一般的には辞書や日本語の教科書を参照するが多いが、一人称代名詞はごく基本的な語彙項目として扱われ、学習者の知りたい情報は必ずしも適切な形で示されていない。そこで、大規模な言語資料を用いた研究が必要になってくると思われる。

そこで、肖(2019)では、一人称代名詞のうち、単数形に注目して、現代日本語書き言葉均衡コーパス(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: 以下 BCCWJ)を用いた調査を行い、(1) 日本語のブログにおいて、一人称単数代名詞の表現パターンは語のレベルでは全 19 種、異形のレベルでは全 33 種、文字種のレベルでは全 66 種存在する、(2) 「僕」と「俺」について、ひらがなよりカタカナが優位を占めるのは、ブログの書き手には、自分をあまり前に出したくないという心理が存在するためである、(3) 現代日本語の一人称単数代名詞の使用に関して、語の選択、異形の選択、文字種の選択は書き手が表出しようとするスタンスと深く関わっている、という知見を得た。しかしながら、肖(2019)では、複数形については全く議論されていない。そこで、本研究では、同じく BCCWJ を使用し、新たに一人称複数代名詞を対象とした調査を行う。

現代日本語における一人称複数代名詞を計量的に調査しようとする場合、BCCWJ に含まれる各ジャンルデータの中で、どのデータを使うべきかという問題が生じる。本研究では、肖(2019)と同様、書き言葉のブログに絞って、調査を行う。これには以下の理由がある。新聞や雑誌では、内容についても表記についても校閲がなされる。これに対し、ブログでは、個人の自由な意見やスタンスの表出が許され、また、表現も書き手に委ねられているためである。つまり、語・異形・文字種の選択と、スタンス表出をみる上で、ブログは最適な言語データであると考えられる。

なお、一人称複数代名詞には様々なバリエーションが存在し、かつそれぞれの表現形が表出するスタンスには多様なものがある。そこで、本研究では、まず、現代日本語で使用される一人称複数代名詞表現形の数調査したあと、それらのスタンス表出に関して、フォーマル度、相手包含度、使用場面の 3 点を取り上げて議論する。

まず、表現形のバリエーションについては、肖(2019)のアプローチを継承し、語・異形・文字種のレベル差に配慮した出現度調査を実施する。次に、フォーマル度については、くだけたテキストとフォーマルなテキストを比較し、後者においてどのぐらい多く出現しているかを計量的に調査する。次に、相手包含度については、個々の用例を質的に調査し、複数代名詞が話者のみを包含するか、話者と聴者とをともに包含するかを検証する。例えば、以下の例を見てみよう。

- (1) あなたたちと違って、私たちはこの提案に反対する。

(2) モーラルの崩壊は、私たち人類の崩壊でもある。

上記の(1)では、「私たち」は話者のみを包含しているが、(2)は話者と聴者が同時に包含されている。こうした一人称複数代名詞の機能の差もスタンスを表出したものと考えられる。

最後に、使用場面については、各種の一人称複数代名詞表現形の共起語を調べることで、それぞれの表現形がどのような話題、内容、状況と結びつきやすいかを統計的に解釈する。

2. 先行研究

一人称代名詞を1つあるいは少数しか有しない英語と比べて、日本語の一人称代名詞は多数存在する。それらが使用者の身分や立場、その時の状況に応じて使い分けられる。一人称代名詞に関する研究には単数形に注目するものが多く、一人称複数代名詞を論じたものは比較的少ない。まず、日本語学または言語学の分野でなされた一人称複数代名詞に関わる研究の一部を見ておこう。

一人称代名詞は「対話の場における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認するという機能」を持つとされている(鈴木, 1973)。氏によれば、一人称代名詞の選択は「話し手が言語という一種の座標系の内部で、自分自身の位置を明らかにする行為」であるとされている。それに加え、日本人は特定の相手との権力関係、親疎の度合いなどに応じて、一人称代名詞を使い分けていることから、このような言葉による自己規定は「相対的で対象依存的な性格」を持っていることが指摘されている。

つまり、日本語においてはコミュニケーションをする際に、相手との上下関係および親疎関係などを判断し、自分をどのように表現するのかを考え、複数の一人称から適切なものを選択することが要求される。

宮島(1977)では、一人称代名詞を文体的特徴が出やすい品詞の1つとし、語の文体という観点から次の表1のように一人称代名詞を俗語、日常語、文章語の3段階に分けた。

表1 一人称の文体的特徴(宮島, 1977)

日本語の段階	概要	一人称代名詞の実例
俗語	書き言葉にはあられわれず、もっぱら、砕けた、下品な話し言葉で使われるものである。	あつし
日常語	積極的な文体の特徴をもたず、どのような種類の話し言葉、書き言葉にも自由に使われる中立的な層である。	わたくし、わたし、あたし
文章語	もっぱら書き言葉や改まった話し言葉だけに使われるものである。	小生、それがし

宮島(1977)の枠組みでは、現代においてよく使われる日常語「わたくし」、「わたし」、「あたし」の

中にどのようなレベルの違いがあるのかについて踏み込んだ記述がない。

張(1996)は中国の短編小説と日本語の訳を比較し、使用される一人称代名詞には以下のようなものがあると述べている(下線部は一人称複数代名詞)。

表 2 中国語の原文と日本語の訳文に使用される一人称代名詞(張, 1996)

	中国語原文	日本語訳文
内訳	我, 咱, 我们, 咱们, 老子	おれ, こっち, こちら, わたし, あたし, わし, おれさま, おら, ぼく, <u>わたしたち</u> , <u>おれたち</u> , <u>ぼくたち</u> , <u>わしら</u>
種類	5	13
使用頻度	197	131

表 2 からわかるように、日本語の訳文に使用される一人称代名詞の種類は原文の 2 倍以上であることや、日本語の訳文における一人称代名詞の使用頻度は中国語原文の 7 割に満たないことが示された。

村上(1999)は、『現代雑誌九十種の用語用字』と『汉语词汇的统计与分析』を比較した。その結果、中国語の人称代名詞の使用率は日本語より高いことが明らかになった。また、一般的に通用する日本語の一人称代名詞として、以下の 18 種を挙げている(下線部は複数形、計 11 種)。

わたし, わたしたち, わたしども, わたしら, わたくし, わたくしたち, わたくしども, わたくしら, ぼく, ぼくたち, ぼくら, おれ, おれたち, おれら, おいら, よ, わがはい, われわれ

日本語は一人称単数代名詞に接尾辞「たち」、「ら」、「ども」を付け加えることによって、複数を表示できるが、それらによって表出される対象には聞き手が含まれている場合とそうでない場合が存在する。この聞き手を含むかどうかという観点は英語では「clusivity」(包含度)と呼ばれる。英語の一人称複数代名詞のスタンスを議論する際、包含度を手掛かりとしたアプローチが一般的である。Filimonova(2005)は、包含度を「包含的」と「排除的」を区別するために作られた用語として扱う。また「包含的」と「排他的」について、以下のように述べている(日本語訳は筆者による)。

包含的および排他的という用語は伝統的に、人称代名詞を使用するに際して、話者も含む指示対象のセットに受信者が含まれるか除外されるかを区別するために使用される。(The terms inclusive and exclusive are traditionally used to denote forms of personal pronouns which distinguish whether an addressee is included or excluded from the set of referents which also contains the speaker.) (p.3)

包含度の観点から見れば、一人称複数代名詞のスタンスについても、話の相手である聞き手を

含めて言う場合と含めないで言う場合がある。一人称複数代名詞に対話の相手を含めるかどうかは、相手との *involvement* (関与) の高低に関係するとされる。Tannen (1989) は、*involvement* を「個人を他の人間、場所、事物、行為、概念、記憶、言語、などと結びつける相互的、感情的つながりである (an interactional, even emotional connection individuals feel, which binds them to other people as well as to places, things, activities, ideas, memories, and words)」のように定義している。一人称複数代名詞包含形の使用の背後には、対話の相手との感情的関わりを高めようとする意図があるといえる。

Wieczorek (2013) によれば、関与度の起源の 1 つは Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論にまで遡ることができる。ポライトネス理論は実際の言語使用における機能を重視する。Wieczorek によれば、包含形を使うのは、相手に近づきたい心理の表れであるため、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジの一種として捉えることができる。一方、排他形を使うのは他者と距離を置きたいのを表すため、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの一種として捉えることができる。

では、日本語の一人称複数代名詞についてはどうであろうか。鄭 (2001) は、話し手の属性と「聞き手包含・非包含」という 2 つの観点から 53 本の映画シナリオを調査し、人称代名詞に後接する複数形接尾辞「たち」と「ら」のふるまいについて考察した。その結果、関東では「たち」、関西では「ら」が好まれることや、関東では、女性に比べ男性のほうが「ら」を多く使用することが示された。また、「たち」のほうが聞き手を包含する場合が多く、一方、「ら」は相手を排除する場合が多いことが明らかになった。

三輪 (2005) は、日本語においては包含形と排他形の区別がはっきりせず、いずれもこの両方の意味に使われることを指摘している。また、おおよその傾向として、「タチ」がつけば包含形、「ラ」がつけば排除形である可能性が高いと述べている。また、包含形としての「われわれ」は、聞き手と話し手を 1 つのカテゴリーにまとめることができることから、相手を自分の側に引き寄せる効果が期待されるという指摘もある (佐藤, 2007)。

では、日本語教育の観点において、一人称複数代名詞の問題はどのように扱われているのだろうか。こうした観点でなされた研究は極めて少ないが、唯一の例外は大浜・荒牧・曾 (2001) である。大浜ほか (2001) は広範囲に使われている 18 冊の日本語教科書を調査した。その結果、一人称単数代名詞は「わたし」、「私」、「僕」、「ぼく」、「あたし」、「わたくし」、「おれ」、「俺」、「わし」の 9 種、一人称複数代名詞は「私達」、「私たち」、「わたしたち」、「僕達」、「ぼくたち」、「われわれ」の 6 種が出現したと報告されている。

以上で概観したように、日本語の一人称が持つバリエーションと機能の複雑性をめぐって、一人称代名詞の使用実態の究明が進められており、それぞれの一人称代名詞のスタンスの解明も試みられている。これらの知見は有益なものであるが、いくつかの点について制約も残る。1 点目は、一人称複数代名詞が取りうる様々なバリエーションのうち、語のバリエーションは調査されているものの、異形や文字種のバリエーションがほとんど調査されていないことである。2 点目は、分析者の主観による分類が多く、大規模なデータベースを用いた記述的・計量的な研究があまり存在しないことである。3 点目は、過去の一人称代名詞の研究は単数形に絞ったものや単数形と複数形の差

を意識していないものが多く、複数形に特化した調査が十分になされていないことである。これらの3つの点の解決が求められている。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

先行研究で見たように、日本語の一人称複数代名詞表現形は前部要素(「私」、「我」、「俺」など)、および後部要素(「たち」、「ら」、「々」など)の組み合わせによって多くのバリエーションが存在すると想定される。しかしながら、先行研究では、それらの表現形の幅や代表形、またそれらのスタンス機能について、必ずしも全体像を明らかにしているとは言えない。そこで、本研究は、BCCWJのブログデータを用い、主要な一人称複数代名詞表現形のスタンス機能と使用実態を明らかにすることを目的とし、以下の4つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定する。

RQ1 一人称複数代名詞表現形は最大何種類存在するか。また、代表形にはどのようなものがあるか？

RQ2 高頻度一人称複数代名詞表現形はそれぞれどの程度のフォーマル度を持つか？

RQ3 高頻度一人称複数代名詞表現形はそれぞれどの程度の相手包含度を持つか？

RQ4 高頻度一人称複数代名詞表現形はそれぞれどのような使用場面と結びついているか？

分析に先立ち、4つのRQに即して、先行研究から考える仮説を立てておこう。RQ1については、肖(2019)の調査により、一人称単数代名詞表現形の種類が63種類存在していることが明らかになっており、一人称複数代名詞についても同じく60から70種類のバリエーションが存在するのではないかと予想される。また、「私達」や「我々」など、「私」と「我」を含むものが多く出現し、くだけたニュアンスを伝える「僕たち」や「俺たち」など「僕」や「俺」を含むものの頻度は極めて低いと予想される。RQ2についていえば、「私」と「我」を含む表現形は高いフォーマル度を持つのに対し、「僕」や「俺」を含む表現形はフォーマル度が低いと予想される。また、RQ3については、相手包含形に関しては、語ではなく、文脈依存の要素が多いことから、はっきりした語との関係性は見られないのではないかと予想される。RQ4については、一人称複数代名詞の中で、「我々」が最もフォーマルで、政治や経済に関係する語などフォーマルな語彙と結びつきやすいのに対し、「私たち」はより幅広い一般的な語と結びつくと予測される。また、「僕たち」や「俺たち」はくだけた私的な趣味や個人生活に関係する語彙と結びつき、各表現形の共起語パターンは一人称複数代名詞の後部要素と関係しないのではないかと予想される。

3.2 データ

本研究では、主としてBCCWJのブログデータを用い、一人称複数代名詞の使用度、相手包含度、共起語を調査する。ただし、RQ2では、一人称複数代名詞の「フォーマル度」を計量化するにあたって、フォーマル度が高いと思われるBCCWJの国会会議録データと、フォーマル度が低いと

思われる『日本語日常会話コーパスモニター版』(Corpus of Everyday Japanese Conversation, 以下 CEJC)のデータを使用する。後者に対して前者における頻度が高ければ、フォーマルな文脈で使用されていると考えられる。

BCCWJ の国会会議録ジャンルは国会における審議の内容を書き起こしたデータであり、総語数はおよそ 510 万語である。CEJC は様々なタイプの日常会話約 200 時間をバランスよく収録するのを目標とするコーパスである。2021 年度の予定本公開に先立ち、2018 年 12 月に 50 時間の会話を対象とするモニター版が公開された。モニター版の総語数はおよそ 61 万語である。話者の選別は性別・年齢などの観点からバランスよく行われ、モニター版のデータには男性 10 名と女性 10 名の会話が含まれている。

3.3 手法

RQ1 については、まず中納言で検索対象をブログに限定し、キーの条件を「品詞」の「中分類」が「代名詞」となるよう設定してから検索を行う。検索結果がダウンロード上限の 10 万件を超えたため、1 回目は 15 ジャンルの中の 10 ジャンルのデータを、2 回目は残りの 5 ジャンルのデータをダウンロードし、2 つのファイルを 1 つの Excel ファイルに統合する。次に、手作業で一人称代名詞と思われるものを抽出する。さらに、一人称単数形に「たち(達, タチを含む)」、「ら(等, ラを含む)」, 「ども」が後接するものを複数形とする。最後に、複数形を対象とし、検索結果に含まれる「語彙素」、「語形」、「キー」の情報に基づき、Excel のフィルター機能を使って語レベル、異形レベル、文字種レベルごとの頻度を調査する。また、全体を頻度順に並べ替えたうえで、上位 10 語を代表形として抽出し、以下の RQ の調査対象とする。

なお、本研究では、文字種の違いを考慮せず、当該の音形全体を指す場合は、全カタカタ表記とし、二重カギカッコで挟む。例えば、『ワタシタチ』は「私達」、「私たち」、「わたしたち」をすべて包含する。

RQ2 については、発話データの書き起こしにおいて、文字種の違いが意味を持たないため、語形の単位で調査を行う。RQ2 で分析対象とするのは「ワタシタチ」、「ワレワレ／ラ」、「オレタチ／ラ」、「ボクタチ・ラ」の 7 種である。具体的には、CEJC と BCCWJ の国会会議録を用いて、5 語の頻度を調査し、前者(CEJC)の頻度に対する後者(国会会議録)の比率を「フォーマル度スコア」とする。

RQ3 については、前後の文脈によって 10 語の用例を手作業で相手包含形と相手排除形に分け、相手包含形の例が全体に占める比率を「相手関与度スコア」とする。最後に、「相手関与度スコア」と「フォーマル度スコア」により、10 語の並べ替えをそれぞれ行う。

RQ4 については、まず、上位 10 語の用例から、それぞれ直前・直後 15 文字分の文脈を切り出し、日本語形態素解析ソフトウェアである KH coder で分析する。次に、KH coder の「抽出語リスト」機能を使い、10 語のそれぞれ頻度上位 100 の共起語に調査対象を絞る。最後に 10 個の代名詞を第 1 アイテム、共通する共起語を第 2 アイテムとする頻度表を作成し、コレスポンデンス分析を行う。なお、第 1 アイテムには 10 カテゴリー(頻度上位の 10 語)、第 2 アイテムには 640 カテゴリー(重複するものを除いた共起語)が存在する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 表現形

語, 異形, 文字種を区別して, BCCWJ に出現するすべての表現形を調査したところ, 以下表 3 の結果を得た。

表 3 一人称複数代名詞の表現形

	表現形	頻度	累計構成比		表現形	頻度	累計構成比
1	私たち	681	28.8%	32	わしら	5	97.3%
2	我々	400	45.7%	33	わたしら	5	97.5%
3	私達	275	57.3%	34	ワタシたち	5	97.7%
4	僕ら	176	64.8%	35	アタシたち	5	97.9%
5	僕たち	108	69.3%	36	私共	4	98.1%
6	われわれ	89	73.1%	37	あたしら	4	98.2%
7	俺たち	74	76.2%	38	私等	3	98.4%
8	わたしたち	71	79.2%	39	ワタシ達	3	98.5%
9	我ら	61	81.8%	40	アタシら	3	98.6%
10	俺ら	35	83.3%	41	アタシ等	3	98.7%
11	俺達	34	84.7%	42	オイラ達	3	98.9%
12	僕達	30	86.0%	43	ワシら	3	99.0%
13	オレたち	26	87.1%	44	あたい達	2	99.1%
14	私ら	25	88.2%	45	アタクシ達	2	99.2%
15	われら	24	89.2%	46	わたくしども	2	99.2%
16	ぼくたち	24	90.2%	47	おいら達	2	99.3%
17	私ども	23	91.2%	48	吾ら	2	99.4%
18	あたし達	15	91.8%	49	ぼく達	2	99.5%
19	うちら	14	92.4%	50	ワタシら	1	99.5%
20	ぼくら	13	92.9%	51	アタイら	1	99.6%
21	僕等	12	93.4%	52	アタクシども	1	99.6%
22	ボクたち	12	94.0%	53	あつしたち	1	99.7%
23	ボクラ	12	94.5%	54	オラたち	1	99.7%
24	おれたち	10	94.9%	55	おいらたち	1	99.7%
25	我等	9	95.3%	56	オイラたち	1	99.8%
26	あたしたち	8	95.6%	57	われ等	1	99.8%
27	わたし達	7	95.9%	58	吾等	1	99.9%
28	俺等	7	96.2%	59	我輩達	1	99.9%

29	オレら	7	96.5%	60	余たち	1	100.0%
30	ボク達	7	96.8%	61	おれら	1	100.0%
31	アタシ達	6	97.0%			2365	

ここで注目すべきことは 4 点ある。1 点目は、一人称単数代名詞の表現形のバリエーションと同じく、60 種を超えるバリエーションが確認されたことである。これは事前の予測を裏付けるものであるが、日本語の一人称代名詞表現形は、単数形の場合も、また複数形の場合も、極めて多様な幅を持つことが新たに明らかになった。

2 点目は、本研究で得られた一人称複数代名詞表現形の幅が日本語教育で指導されているものを大きく上回っていることである。大浜ほか(2001)は 18 種類の日本語教科書を調査しているが、そこで報告された一人称複数代名詞は 6 種類しかない。本研究の上位 10 語に限って比較しても、「僕ら」、「俺たち」、「我ら」が含まれていない。日本語教育の目的が日本語で一般的に見聞きする語彙を幅広く学ぶことであるとするならば、従来の日本語教育で提示されている代名詞表現形の幅はあまりに狭く、こうした語について追加して教えていく必要があるだろう。

3 点目は、本研究で得られた一人称複数代名詞表現形のバリエーションが先行研究で示された範囲を大きく超えたことである。先行研究の中で村上(1999)は、11 種と、相対的に多くの一人称複数代名詞の語形を示していた。しかし、今回の調査結果と照らし合わせると、以下の 7 語は村上の調査に含まれていなかった。

《ワレラ》, 《ワシラ》, 《ウチラ》, 《オイラたち》, 《ワガハイたち》, 《ヨたち》, 《オノレたち》
--

なお、上記の大半は比較的低頻度なものであったが、《ワレラ》についてはコーパス調査で全体順位が 9 位となっており、極めて高頻度なものの 1 つである。今回の調査によって先行研究が見落としていた重要な一人称複数代名詞表現形を抽出することができたと言える。

上記より、先行研究で示されたものに比べ、圧倒的に多数の一人称複数代名詞表現形が存在することが明らかになったが、これらのすべてが同等の重要性を持っているわけではない。というのも頻度が極めて偏っているためである。最後に、4 点目として、一人称複数代名詞は全体として 60 種類を超えるバリエーションがあるが、高頻度に使用される一部の表現形とほとんど使われない表現形に二分されているということである。61 種のうち、どこまでを重要な表現形とみなすかは難しい判断となるが、累計構成比に注目し、仮に 80%を基準とすれば、9 語が、90%を基準とすれば、16 語が、95%を基準とすれば、25 語が抽出される。学習者のレベルと目指す段階に応じて、学べき一人称複数代名詞の範囲を調整していくことが必要であろう。

4.2 RQ2 フォーマル度

RQ2 では、頻度が上位 10 位の一人称複数代名詞が持つフォーマル度を計量化してみた。なお、発話データにおいて、文字種の違いが意味を持たないため、フォーマル度の調査は語形の単

位で調査を行う。以下表 4 はその結果である。

表 4 一人称複数代名詞のフォーマル度

語形	CEJC	国会会議録	フォーマル度 国会会議録／CEJC
《ワレワレ》	2.29	30.51	13.32
《ワタシタチ》	7.37	13.35	1.81
《ワレラ》	0.16	0.06	0.36
《オレタチ》	2.13	0.25	0.12
《ボクタチ》	0.98	0.06	0.06
《ボクラ》	5.24	0.24	0.04
《オレラ》	0.98	0.02	0.02

ここで注目すべきことは 3 点ある。1 点目は、「私」と「我」を含む表現形はほかの語形より高いフォーマル度を持つという仮説は支持されたことである。フォーマル度が 1 を超える場合、その語がフォーマルな文脈で使用されているとするならば、7 語はフォーマルな文脈で好まれる「ワレワレ」、「ワタシタチ」とそれ以外の 5 語に二分されることが明らかになった。したがって、一人称複数代名詞のフォーマル度は後部要素よりも前部要素とより強く関係していると言えるだろう。

2 点目は、「タチ」を含む「オレタチ」と「ボクタチ」は「ラ」を含む「オレラ」と「ボクラ」よりフォーマル度が高いことである。前部要素が同様な場合、それに付随する後部要素が一人称複数代名詞のフォーマル度に影響する可能性が示唆された。

3 点目は、国会会議録は、一般に最も硬い日本語を代表するジャンルとみなされているが、実際には、《ワレワレ》のみならず、くだけた《オレタチ》、《ボクラ》、《ボクタチ》などの語も使用されているということである。以下はその例である。

- (3) 団塊のジュニアの問題というのは大変重要な問題でございまして、我々の予想をかなり裏切りました。(国会会議録, 2005)
- (4) 国有林であります、地域の方々には、おれたちのクロマツ林だ、こういう極めて強い感情が残っている(国会会議録, 1984)
- (5) これから野党の方々に加わっていただきたいというのが僕らの希望であります。(国会会議録, 1998)
- (6) こういう問題も僕たちは耳にするんですが、今日皆さんのお話を聞いておりまして、本当に日本人に生まれてよかったなあと。(国会会議録, 1987)

くだけた印象を持つ《オレタチ》、《ボクラ》、《ボクタチ》は、例 6 のように、引用部で使われることもあれば、例 6 と例 7 のように、叙述文で用いられることもある。硬い話し言葉を代表する国会会議録

には幅広い一人称複数代名詞が使用されていることが明らかになった。

4.3 RQ3 相手包含度

次に、相手包含度の結果を見てみよう。表 3 の上位 10 語の用例を手作業で「相手包含形」と「相手排除形」を分け、全用例数に対する相手包含形の比率を相手包含度と計算したところ、以下表 5 の結果が得られた。

表 5 相手包含度

順位	表現形	相手包含度
1	私たち	30.0%
2	我々	23.8%
3	私達	14.5%
4	僕ら	2.3%
5	僕たち	5.6%
6	われわれ	43.8%
7	俺たち	16.2%
8	わたしたち	49.3%
9	我ら	8.2%
10	俺ら	17.1%

表 5 から分かることとして以下の 4 点がある。1 点目は、相手包含度は 0%か 100%という択一的なものではなく、同じ語であっても、様々な使われ方がなされているということである。以下の例を見てみよう。

(7) 我々観光客は単純に「残して欲しい」と思っていますが、当局にとっては保存維持は大変なことです。(ブログ・地域)

(8) 21 世紀の我々の生活を支えるジェネリックテクノロジーとしての発展を期待されている。(ブログ・科学)

この場合、同じ「我々」であっても、11 では相手は排除されるのに対し、12 では、相手は包含されている。この語のみならず、すべての一人称複数代名詞において、こうした二重性が観察された。ただし、「我ら」、「僕たち」、「僕ら」の 3 語については、相手包含度が 1 割未満であり、ほとんどが相手排除形であることも示された。

2 点目は、同じ《ワタシたち》であっても、文字種が異なれば、表現形の相手包含度が大きく変わることである。具体的には、ひらがな(わたしたち:49.3%)>漢字ひらがな混在(私たち:30.0%)>漢字(私達:14.5%)の順序となる。以下の用例を見てみよう。

(9) すべて人間をとりまく事柄は神が支配しそんな中でわたしたちには確実な希望が与えられています。(ブログ・生活と文化)

(10) この太陽が地球の裏を回って、また私たちを照らしてくれます。(ブログ・芸術と人文)

(11) 私達だけで行くつもりだったんですが・・・義親も便乗！(ブログ・Yahoo！サービス)

上記の例からも明らかなように、ひらがなは柔らかいイメージを持つため、話者の陳述における垣根が引き下げられ、読み手を巻き込むようなスタンス機能が発生している。一方、漢字表記は語としてのまとまり度が高く、主張に明確な境界を与えるため、読み手が巻き込まれることは少なくなってくる。日本語母語話者はおそらく無意識のうちに、文字種を使い分けることで書き手と読み手の関係を調整していると言えるだろう。

3点目は、前部要素によって相手包含度が変化する可能性が示されたことである。上位10語のうち、前部要素のみに注目すれば、「わたし」、「われ」、「私」、「我」、「俺」、「僕」の6種となる。それぞれの前部要素を持つ表現形の相手包含度の平均値を比較すると、「わたし」(49.3%)>「われ」(43.80%)>「私」(22.25%)>「俺」(16.65%)>「我」(16.00%)>「僕」(3.95%)という結果が見られた。このことは、前部要素が相手包含度に影響を及ぼす可能性を示していると言える。

4点目は、後部要素についてである。後部要素については、「たち」、「達」、「ら」、「々」の4種類が存在するが、それぞれの後部要素を持つ表現形の相手包含度の平均値を比較すると、「々」(33.80%)>「たち」(20.22%)>「達」(14.50%)>「ら」(9.20%)となる。

4.4 RQ4 共起語

RQ4 では、高頻度一人称複数代名詞表現形の共起語を手掛かりとして、それぞれの表現形の典型的な使用場面を調べるため、コレスポンデンス分析を実施したところ、以下の結果が得られた。

[illegible]

コレスポンデンス分析では、通例第 1 軸によって左と右に、第 2 軸によって上と下に分けられる。つまり、全体は 4 つのグループに分割されることになる。また、原点に近い要素は特定の性質を持たない中立的な項目であると考えられる。そこで、本研究では、原点を中心に、 ± 0.5 の範囲に入るものを「原点付近」と定義し、10 語を以下の 5 グループに分けて解釈を行う。

象限	表現形	典型的な共起語	特徴
第一象限	俺たち、俺ら、 僕ら	全員、びっくり、必死、先生、ガキ、ビール、ネタ、オヤジ、素晴らしい、難しい、未来、守る、命	インフォーマルで私的
第二象限		会議、日本、生き方	
第三象限	われわれ、我ら、 わたしたち	経済、改善、現代、愛する、偉人、国、仲間、心、エース、王妃、野球、核弾頭	フォーマルで公的
第四象限	僕たち	期待、悲しい、困る、残念、勉強、	インフォーマルで公

		ゼミ, バンド, 休み, ツアー, プレー, 先制	的
原点付近	我々, 私たち, 私達	見る, 思う, 人類, 環境, 日本, 人間, 地球, 世界, 自然, 国家, 国民, 生き方, 考える	ニュートラル

以下, 5つのグループについて, 順に用例を見ていくことにしよう。

第1象限では, 「俺たち」, 「俺ら」, 「僕ら」の3語が含まれる。これらの3語は「高校」, 「ビール」, 「先生」, 「力」など極めて個人的な内容について述べるときに使われやすい。また, 「素晴らしい」, 「難しい」, 「必死」など個人の判断や感情を表す形容詞と結びつきやすい。

(12) 俺たちにも喰わせろっつうの！(ブログ・生活と文化)

(13) ん？俺らの飯の間にだけ降った？？奇跡。(ブログ・趣味とスポーツ)

(14) 未来は僕らの手の中！(ブログ・学校と教育)

上記のように, 「俺たち」, 「俺ら」は「喰う」, 「～つうの」, 「飯」など俗な言い方と共起しやすく, 主として親しい者同士間のくだけた会話に使用される。「僕ら」は「夢」, 「未来」など抽象的な言葉や, 「素晴らしい」, 「難しい」など個人の判断や評価を表す言葉と共起しやすく, くだけて親しみやすいイメージを連想させやすいものとなっている。

第2象限では, 「会議」, 「日本」, 「生き方」といった共起語があるが, そこに含まれる一人称複数代名詞表現形は存在しなかった。

第3象限では, 「われわれ」, 「わたしたち」, 「我ら」の3語が含まれる。これらの3語は「現代」, 「偉人」, 「神」, 「国」, 「愛する」といったフォーマルな語と共起しやすく, プライベートなことより, パブリックな内容について述べるときに用いられやすい。以下はその用例である。

(15) われわれは経済と自身の両方を変えることについて考えるべきだ。(ブログ・Yahoo！サービス)

(16) 神はわたしたちの内にとどまってくださり, 神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。(ブログ・生活と文化)

(17) 準優勝投手になった前田幸長氏そして「我らの核弾頭」佐々木誠氏！！(ブログ・趣味とスポーツ)

「われわれ」は「事業」, 「経済」, 「選挙」などの漢語とともに出現することが多く, 主に社会的問題について意見を述べる時に使われる。親しみやすいひらがなを選択することによって, 相手への押し付けが弱められる効果が期待される。

「わたしたち」は聖書などに書かれた主の教えや, 多数の人に向けて平和を呼びかけるような文

章に使われやすい。読み手にわかりやすく、やわらかい印象を与える。

「我ら」は野球などスポーツ関連の内容を語る場面に使われやすい。ときに比喻や誇張などのレトリックを用いることによって、陳述される内容や言及される対象に対し、強い団結心、誇りや敬意を表している。

第 4 象限に布置された語は「僕たち」の 1 語のみである。以下はその用例である。

(18)「僕たちにはハードな日々が続くけど、冷静でいる必要がある。」(ブログ・趣味とスポーツ)

「僕たち」は学校のことや、自分の「期待」や「残念」に思うことを語るとき、または例 18 のように、スポーツ選手がインタビューを受ける場面に使われやすい。「僕ら」を比較すると、「僕ら」は第 2 軸の上部、「僕たち」は下部に分けられたことから、「たち」をつけることによって、「僕」が持つ個人的な意味合いが薄められ、パブリック性が増している可能性が示唆された。

最後に、原点付近に布置されているのは「我々」、「私たち」、「私達」の 3 語である。これらの 3 語は「思う」、「見る」、「行く」など一般動詞に伴って使われ、衣食住や家族などにプライベートのことを語る場面に用いられると同時に、「地球」、「人類」に関係する公的なことについて語るときも使用されている。したがって、これらの 3 語は特にはっきりした性質を持たない、幅広い内容を語るときに使える一人称複数代名詞であると考えられる。以下はその用例である。

(19) 私たち人間は生きていく上で暗黙のルールや常識といったものを共有しています。(ブログ・学校と教育)

(20)この地上の崩壊は我々人類の崩壊でもあるのです。(ブログ・Yahoo! サービス)

(21) 私達の生きている地球ではまだ戦争が続いている。(ブログ・Yahoo! サービス)

上記のように、この 3 語は地球や「世界」、「人間」、「国民」など広い概念を意味する語と結びつきやすく、公的な場面で、相手との連帯感を作り出し、他人を自分のカテゴリーに引き込むニュアンスが含まれると考えられる。

以上を踏まえ、第 1 軸上の位置に注目すると、前部要素が「僕」と「俺」である 4 語が第 1 軸のプラス方向に、「ワレ」や「ワタシ」を含む残りの 6 語がマイナス方向に布置されたことが明らかになった。このように、第一軸はフォーマル度を分ける軸となっていると言える。

第 2 軸上の位置に注目すると、プラス方向に布置された「俺たち」、「俺ら」、「僕ら」は「いい加減」、「素晴らしい」、「難しい」、「必死」などの個人の判断や感情を表す形容詞と結びつきやすい。一方、マイナス方向に布置された「僕たち」、「我ら」、「わたしたち」、「われわれ」の 4 語は、多数の読み手を想定し、パブリックな内容についてコメントをしたり、主張を示したりする時に使われやすいという点で共通している。したがって、第 2 軸は伝達する情報のパブリック性を分ける軸となっていると言える。

5. まとめ

本研究では、一人称複数代名詞の使用実態とスタンスを、表現形のバリエーション、フォーマル度、相手包含度、使用場面の 4 つの観点から検討を行った。以下、リサーチクエスション順に内容を簡潔にまとめる。

まず、RQ1 では、現代日本語において、語・異形・文字種を考慮した場合、一人称複数代名詞は最大に 60 種を超えるバリエーションが存在することが明らかになった。

次に、RQ2 では、フォーマル度について、「私」と「我」を含む表現形はほかの語形より高いフォーマル度を持つことや、「タチ」を含む表現形は「ラ」を含む表現形よりフォーマル度が高いことが確認された。

また、RQ3 では、相手包含度について、文字種が異なれば、表現形の相手包含度が大きく変わることや、前部要素によって相手包含度が変化する可能性が示された。

最後に、RQ4 では、典型的な使用場面について、上位 10 語はフォーマル度と情報の公的性の 2 観点から 5 つのグループに分類できる可能性が確認された。

もっとも、本研究には制約も残されている。1 点目は RQ2～RQ4 において、分析の対象をごく一部の例に限定したことである。本研究では、61 種にも及ぶ一人称複数代名詞表現形のうち、頻度が上位 10 位であるものに絞って調査を行った。今後は調査対象の範囲を広げ、一人称複数代名詞表現形とスタンス表出の関係についてさらに詳しく調査する必要があると思われる。2 点目は RQ4 において、「私たち」、「我々」、「私達」の 3 語の違いが明らかになっていないことである。今後は 3 語に絞ってコレスポンデンス分析を行い、それぞれの違いを細かく調査することも今後の課題となるだろう。

引用文献

- 大浜るい子・荒牧ちさ子・曾儀婷(2001)「日本語教科書に見られる自称詞・対称詞の使用について」『教育会研究紀要 第二部』(中国四国教育学会) 47(2), 342-352.
- 佐藤裕(2007)「“inclusive we”としての『われわれ』」『ソシオロジ』(社会研究会) 52(2), 109-113.
- 肖錦蓮(2019)「現代日本語における一人称単数代名詞の選択と書き手スタンスの表出」『信学技報』119(114), 19-24.
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』東京:岩波新書.
- 張佩霞(1996)「中国語、日本語における人称代名詞の使用とそこに窺われる文化の違い」『語文論叢』23, 1-19.
- 鄭恵先(2001)「複数を表す『たち』と『ら』の使用における選択条件:シナリオの分析結果を中心として」『社会言語科学』4(1), 58-67.
- 宮島達夫(1977)「単語の文体的特徴」松村明教授還暦記念会(編)『国語学と国語史:松村明教授還暦記念』(pp.871-903) 東京:明治書院.
- 三輪正(2010)『日本語人称詞の不思議ーモノ・コト・ヒト・キミ・カミ』京都:法律文化社.
- 村上嘉英(1999)「中国語と日本語の人称代名詞について」『中国文化研究』16, 21-38.

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow, UK: Pearson Education.
- Hyland, K. (2005). Stance and engagement: A model of interaction in academic discourse. *Discourse Studies*, 7(2), 173-192.
- Tannen, D. (1989). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Wieczorek, A. (2013). In-group and out-group markers in the service of political legitimization: a critical-methodological account. In I. Witzak-Plisiecka (Ed.), *Pragmatics of semantically-restricted domains*(pp.65-78). Cambridge, UK: Cambridge Scholars Publishing.